



筑紫女学園大学リポジット

古代イランの「こぶ牛形象土器」--平成19年度人間文化研究所「特別研究会」に関連して--

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大津, 忠彦, OHTSU, Tadahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/423

古代イランの「こぶ牛形象土器」

—平成19年度人間文化研究所「特別研究会」に関連して—

大 津 忠 彦

Ancient Iranian Pottery in the Shape of Zebu

—Concerning the restoration of manufacture technique
and its archaeological meaning—

Tadahiko OHTSU

はじめに —本学アジア文化学科担当「特別研究会」概略—

筆者は、平成19年度人間文化研究所「特別研究会」に採択されたアジア文化学科担当研究テーマの企画責任者として、本論題目に関わる研究会を開催した。その梗概については、大学当局宛の「報告書（文責：大津）」を既に提出している。便宜上、ここに再録しておきたい（図版割愛）：

- 開催日時 平成20年3月14日（金） 13時30分～15時30分
- 開催場所 筑紫女学園大学 3号館4階工作室（3403教室）
- 研究テーマ 古代イラン形象土器の実験考古学的研究
- 企画責任者 大津 忠彦（本学アジア文化学科教授）
- 講師 井手 勝彦（陶芸家、佐賀県文化財保護指導員、嬉野市文化財審議委員）
大津 忠彦
- 参加者 石其琳・秦惟人・崔淑芬・田村史子・喜多村百合・裴海善・横山豪志・緒方知美（以上本学アジア文化学科教員）・小川直樹（本学人間福祉学科教員）・西村陽子・大鶴香（以上本学幼児教育科教員）以上11名（除、前記講師2名）
- 研究会概要

① 古代イラン形象土器の考古学的特徴（大津忠彦）

「イラン形象土器」の全般について解説。そのなかで、今回復元の器形となる「こぶ牛形象

土器」について、その帰属年代ならびに分布を考古学的に分析。主たる考古資料出土地であるカスピ海南岸ギーラーン州の地勢、風土の特異性がイラン鉄器時代にこの形象土器をうみだしたのではないか、ということを示唆。また、「こぶ牛形象土器」の復元に関する研究史と、製作技法に関わるいくつかの説を紹介した。

② こぶ牛形象土器製作復元の実際（井手勝彦）

ロクロ成形によるイラン「こぶ牛形象土器」の製作を実演：前軀、後軀を個々にロクロ成形し、一部を切り取り、繋ぎ合わせて製作する手法。四肢もロクロ成形。角、尾については手びねり成形後、体軀部に取り付けた。大津が発表①で提示した、先行研究試案と、技法上、相共通するところが見られた（井手は事前にこれらの説を知らされていない）。製作過程で、焼成の際の破損防止のための諸工夫や、器表面整形についての解説がまじえられた。このたびは、成形のみの製作復元であり、焼成やこれに先立つ諸段階（磨研など）については、製作品の乾燥期間が必要なため、実際には行われず、井手による解説のみとなった。

このたびの「特別研究会」からの成果、とくに当日実演の陶工井手勝彦氏による作陶工程からの成果検証についてはいましばらく時間を要するところがあり、本論では復元作陶のモデルとなった古代イラン「こぶ牛形象土器」について、関連する事項のいくつかをここに取り纏めておきたい。

I. 「こぶ牛」意匠

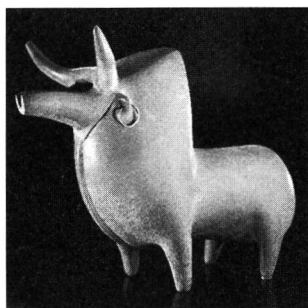


図1. こぶ牛形象土器

「こぶ牛形象土器」とは、イラン高原北西部、こんにちのイラン国ギーラーン州の鉄器時代（一般に、紀元前1千年紀のうちアケメネス朝ペルシア開始期以前）遺跡より出土する形象土器のひとつと捉えられている（図1）。当該地域の形象土器がその意匠とする動物には、「こぶ牛」以外にシカ、ヤギ等もあるが、それらは獣角表現によって動物の種類をある程度推察できるものの、「こぶ牛」ほどの確からしさはない。これに対し「こぶ牛」は、その表現がいかにデフォルメされようとも、頭部のうしろに強調されたこぶのたかまりにより、表現対象動物の種類を同定することができる。それは、こぶ牛がこんにちなおギーラーン州において普段に見ることのできる家畜獣の一つであるからである（図2）。

こぶ牛の動物学的考証においては、その出自に関する時代的、地域的諸問題は未だ確証に至らないところが多いようであるが、考古学資料にその造形表現が散見される所はかねてより注視されてきた。すなわち、モエンジョ・ダロ出土の印章（紀元前2500年頃）をはじめ、スーサ遺

跡(イラン)、ニネヴェ遺跡(イラク)、ゲラル遺跡(パレスティナ)、スミルナ遺跡(トルコ)等々の容器、印章、立像あるいは貨幣意匠として表現されて、時代的に最も遡るのはアルパチア遺跡(イラク)のハラフ期資料とされている。ゾイナーは、しかし、これを「考古学的偶然の出来事とみなすことができる。というのはその後の発見物がインドを示唆し、事実インドがメソポタミア文明と交流があった証拠とみなされてきたからである」とした。ゾイナーのこの指摘ならびにエジプトやギリシアとの関わりについての、考古学資料からの考察は先行研究として注視、再検討すべきところが多い(ゾイナー、1983年)。

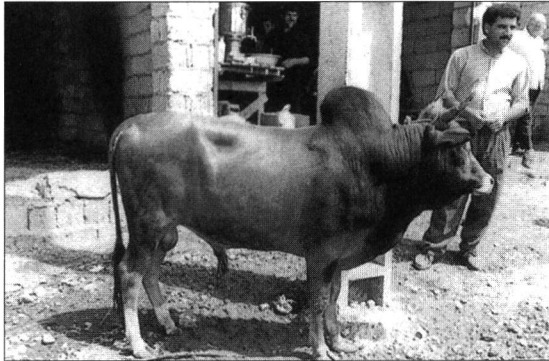


図2. マルジャガル(ギーラーン州)のウシ市にて
(1997年筆者撮影)

ゾイナーの論を古代イラン資料から再考する際、しかし、この種の考古資料に関し注意事項がある。それは、こんにちまでに知られている「こぶ牛形象土器」のほとんどが、考古学でいう「出土状況」すなわち資料上の出自がはなはだ不明であることである。

Ⅱ. 古代イランのこぶ牛形象土器と「アムラシュ物」

イラン西北部をその出自として往々紹介のあるこの「こぶ牛形象土器」は、とくにその独特な造形美から、「アムラシュ物」を代表する土器のひとつとして、はじめは骨董市場で注目されてきた経緯がある。「アムラシュ」とは、かつてその周辺域遺跡「盗掘品」の実質上集散地となっていたギーラーン州内の町邑名。この「アムラシュ」あるいは「アムラシュ文化」という用語については、1961年にパリで開催された展覧会の関連出版物 *Sept mille ans d'art en Iran* (Musée du Petit Palais, 1961) には「アムラシュ文化」が2、3年前より知られている旨の記載があるから、遅くとも1950年代末までにはその存在が認められていたといえよう。しかし、考古学者による発掘調査において「こぶ牛形象土器」の出土状況が確認された事例は、1961年10月～62年11月にネギャフバーンが行ったマールリーク遺跡が最初であり(Negahban, 1964, 1996)、また、それ以後は出土事例の正式報告が一切無いので、イラン出土といわれる「こぶ牛形象土器」資料は、理屈上、先ずはその真偽に注意すべきということになる。

Ⅲ. 「アムラシュ土器」の資料課題

① 出自不詳の盗掘品と盗掘が常態化する社会

イランでは、先の革命(1979年)以前、古代遺跡の「盗掘」がなかば公然と行われていた。そこには、もちろん社会的原因があるものの、ギーラーン州にあってはイラン古代遺跡の有り様もひとつの要因となっている(ここでいう「古代遺跡」とは、紀元前1千年紀以前に帰属するもの

を指す)。すなわち、ギーラーン州の多くの古代遺跡は、それとはっきり外見を識別できる形態にないのである。「タリシュのドルメン文化」(江上、1965年)のように、ある程度の大きさを以ってその遺構が露出するものもあるが、イラン高原南に比較的多く遺存する石造りの「記念建造物」や、あるいは「タッペ」、「テペ」、「テル」と呼称される西アジア特有の「遺跡の丘」を、ギーラーン州では二三の例外を除き、見ることができない。イラン人考古学者ハーキャミーはかつて「時代が移りかわろうと、敢えてひとところに留まり居る必要性のない好都合な自然風土」を、ギーラーン州における「異なる生活層」の形成、すなわち「遺跡の丘」の見られない理由として指摘した(Hakemi 1973)。すなわち、遺跡が地表上に遺構として認識できない状況下であるから、偶然に遺物が掘り出され、そのことが繰り返される。ギーラーン州はこの「繰り返し」、そして遺跡のほとんどが「古墓」の群集であったことが社会的因習を形成していった一因と考えられる。

筆者は、かつてイラン考古資料蒐集家のひとり柿崎尚(かきざき ひさし、1902-84年)が、1953年「国際連合技術援助管理部門職員」として、さらには1962年「[イラン小規模工業技術訓練センター]理事長」として彼の地に赴き、そこで実見した古代遺跡の様相を綴った記録に、当時のギーラーン州で頻発する「盗掘」状況の様を見出し紹介したことがある(大津、2004年)。その凄まじいばかりの「盗掘」現場の惨状たるや、「小屋の後方の丘が姿の変る程掘り盡された場所であり白く見へるのは掘出された石灰質土壌であって数キロも離れた所からすら一目判明する程の大規模な盗掘であった(柿崎[1964])」、「偶々山を越へたカスピ海側のアムラッシ(=アムラシュ、筆者注)で古墳が発掘され始めた事に刺激された村民は(中略)僅か3~4年の間に山の姿が変る程掘られたには怨と道づれとは申せよくもこの様に掘盡されたと敬服するほどだった(柿崎[1964])」。引用部後半の「村民」とは、柿崎が探訪したアムラシュ近傍の寒村シールクウ(現存)のことである。

イラン南部の代表的古代遺跡、例えばスーサやベルセポリスなどは壮大な歴史的記念建造物遺構がそれらを構成し、前者は旧約聖書、後者は古代ギリシア史によって古くより語り継がれてきたこともあいまって、外見だけでもこのうえなく目立つ遺跡をさらに顕在化にしている。このような「目立つ遺跡」は北西イラン域にはない。ところが、この北西イラン域を出自とするいわゆる「秘宝」は決して少ないわけではなく、例えばかつての「アスタラバード」(現在のゴレスターン州ゴルガン)の事例のように、はやくも1840年代最初期にその存在が報告されているものすらあるほどである。「秘宝」のほとんどは、地上に聳えて目立つ遺跡からというよりも、ギーラーン州の事例のように、古墓の副葬品に由来し、かねてより偶発的に発見され、意図的な「盗掘」のえじきとされてきたのである。そしてさらには「盗掘」が「贗作」を生み出すという負の連鎖が出来上がって行くこととなる。

贗作物にはかならずといっていいほどその「モデル」となった由緒正しい資料が存在する。かつて東京の某百貨店で物議を醸し、その後事件へと発展の契機ともなった金製の「贗作物」の場合、そのモデルは「イラン国立博物館(旧バースターン博物館)、テヘラーン」所蔵の金製ゴブレットであった。この金製品はケラールダシュト遺跡(マーザンダーラーン州)より偶然発見されたも

のであった。伝えられるところによれば、1934年、ケラールダシュトにおける離宮造営中、庭園内に設営された池の下に、人が入れるほどの空隙が突如出現。内部をあらためたところ、その中には金製の短剣や盃、ゴブレットなどを含む125点にのぼる金製品、銀製品などの副葬品が人骨の傍らにあった。こんにち「ケラールダシュトの秘宝」と呼ばれるものの出現である。

古墓から金銀製品が多出するとなればそれは恰好の盗掘餌食となる。またクルディスタンの「ジヴィエ秘宝」発見事例(1947年)のように、自然の猛威(嵐)が露呈せしめた秘宝も、それが金目のものであったため、発見と同時に散逸してしまった。

ケラールダシュトから10年後、取締り当局は王命により、歴史的価値を有する金製品を等量のお金で補償する条件で、テヘラーンの国立博物館に収集した。また、1955年、サーリー(マーズンダラーン州)においてサーサーン朝の銀製容器が偶然発見されたことを契機に、ケラールダシュト遺跡の再調査がなされたともいわれている。残念ながらその経過、報告については詳らかではない。どうやら場所柄もあって、大規模な調査は当時不可能であったらしく、調査地点は本来の「秘宝」発見地点から少し離れたところにあえて設定されたようだ。新たな調査地は地元農民が土器を偶然発見したことから遺跡と判明したところであった。そのうちの1ヶ所では、山の斜面に31基の古墓が群集し、副葬品にはガラス玉、青銅製利器、指環、銀環などのほか、多くの「黒色土器」があったという。

ケラールダシュト遺跡は、たまたま王宮にかかわるところから豪華金銀製品の発見ということでとりわけ注目を集めたわけだが、結果的に周辺域の考古学調査をその後飛躍させる一因となったと考えられる。そして、アムラシュにおいて農夫が偶発に遺物(土器)を発見したことが、国立博物館による緊急調査を行わせることとなった。具体的には、トマジヤーン遺跡、オマーム遺跡(いずれもギーラーン州)において、36基もの古墓が確認された。イラン考古学史において、1950年代の終わりからイスラーム革命(1979年)までを考古学研究の「急成長期」とする見方がある。「ケラールダシュトの秘宝」発見はその象徴的出来事のひとつであったとともに、その後「アムラシュ物」を出現させる動因とみなされよう。

② マールリーク遺跡 - 「こぶ牛形象土器」の確認

前述のような状況下、イラン人考古学者ネギャフバーンが行ったマールリーク遺跡の発掘調査(1961年10月～62年11月)は当該地域の研究史における画期となった。この遺跡は「マールリーク・テベ」と通称されるが、いわゆる「遺跡の丘」ではなく、径145×80m、高さ10余m規模の自然丘である。

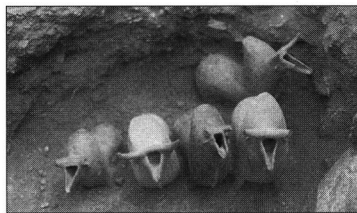
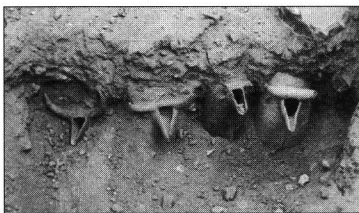


図3. マールリーク遺跡第18号墓、「こぶ牛形象土器」の出土状況(Negahban,1996)

確認された53基の古墓のほとんどは、積み石による墓室を構成していた。ウマを鄭重に葬った事例を含め、千点もの青

銅製鏃、剣、棍棒、甲冑等の武器・武具やヒョウ、オオカミ、イノシシ、シカ、頸木と鋤を取り付けられたウシなど表現する青銅像、その他金製容器、装身具を副葬するこれら古墓をこの地の王侯、武人階級のものとして推察した。土器の副葬例も多く、形象土器には人物裸体像、シカ、ヒツジ、イノシシなどと共に「こぶ牛」(複数)があった。それらは、角と瘤が強調され、器表面は丁寧な磨研調整仕上げ、耳に金環をつけているものもある。そして5点一括して埋納されていた(図3)。これが「こぶ牛形象土器」の考古学的一級資料(=考古学研究者が行う考古学調査によって、出土状況の確認された考古資料)第一号、そして今まで報告のあるうちでは唯一の事例である。

マールリーク遺跡の帰属年代は、おもに土器や青銅製利器の型式から、紀元前2千年紀末から1千年紀初めころと考えられる。それはイラン青銅器時代末から鉄器時代初期にあたり、イラン高原へ「イラン人(アリア人)」が移動・定住していった最初期と仮定される時期に相当するのであり、イラン古代史上の重要な画期にあたる。

③ いまなお現地で製作される「こぶ牛形象土器」

筆者は1997年6月27日から同年7月16日の期間、ギーラーン州政府の招聘のもとに同州内の考古学調査活動(踏査)を行った。その成果については、これまでにいくつかの報告書を既に発刊するとともに、折にふれ学会発表等をおこない、その後の一連の日本・イラン共同調査共々あらためて活動の総括をしてきた(大津、2006年)。1997年の共同調査は、州政府レベルながらイラン側が「イラン革命」後に外国調査隊を公式に受け入れた第1号であった。その調査時、ギーラーン州のラーヒージャーンからデイラマーンに至る山間の街道沿いの村キャレナーダーンにおいて、土製品を焼く小規模の現代窯を実見する好機があった。鬱蒼たる山の麓にあるこの土器工房は所有者に因み「ショクリー窯」と呼ばれ、日常生活雑器である水壺、ヨーグルトやバター製造用の壺などを作っていた。聴き取り調査によれば、原材料の粘土は近くの谷から採取、窯用燃料には周囲の山の木々をあてる由。ロクロ成形である。

ギーラーン州は山間に木々が生い茂るほどに降雨量が多く、かなりの湿潤地帯である。前記ラー

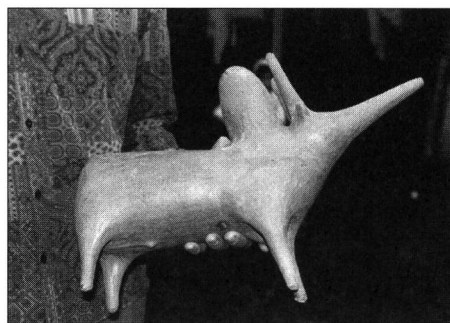


図4. キャレナーダーン(ギーラーン)の陶工と「こぶ牛形象土器」(1997年筆者撮影)

ヒージャーンはイラン最大の茶葉生産地であり、「茶所」としてイラン中にきこえている(1995年の生産高は56,000トンで世界第9位)。じつは、茶葉の生産地であることの要件のひとつ「湿潤地帯」は、同時に、土器窯による焼き物製作の条件

でもある。燃料としての薪を供給する森林保全もさることながら、いくつもの製作工程をたどらなければならないような複雑なかたちの土器成形のためには、湿潤な気候環境は必須要件なのである。すなわち、ギーラーン州で「こぶ牛形象土器」が製作可能なのは、ひとつにはこの自然環境のおかげなのである。そして、たしかにキャレナーダーン村の「シヨクリー窯」では、その好条件と、社会的需要から現代版「こぶ牛形象土器」が特産品として堂々と作られていた。筆者はその見事さと、値段のてごろさから購入する気になったが、出来栄えたるや博物館等にならぶ資料とあまりにも類似し、それはイラン出国時に税関検査でトラブルが予想されるほどでもあったため、敢えて記録に留めるだけとしたほどである(図4)。全体的形状、細部表現はもちろんのこと、色調、器面調整(磨研)具合から受ける質感は、「盗掘品」といわれても区別し難いほど。「盗掘品」すなわち骨董価値を付加しようと思えば、それらしく泥で汚したり、一部欠損させたり、そしてわざと壊して再度復元・修復すればよいのである。

筆者はかつて都内の某大学所蔵の考古学資料のなかに、「こぶ牛形象土器」の現代製品をみたことがある。それはイラン古代土器資料としてかつて購入されたものであるが、破損して観察されたその内部状況は明らかに現代製であることを示していた。古代土器であるか否かその真偽を見極めることは、外表面だけの観察からでは、まず殆ど不可能なのである。

IV. 「こぶ牛形象土器」の製作工程問題—先行研究との比較

1967年刊行の小冊子“Amlash Art”には、Paul D. Clercによる「こぶ牛形象土器」試作実験の紹介がある(Gabus et al. 1967)。それはロクロを使用して「こぶを含む頸の部分」と「脚部および胴部」とを、それぞれ別々に作り、爾後、組み合わせる手法である(図5)。前者の製作にあたっては、ロクロによって端部の閉塞したかたちをつくった後、側面の一部を切除し、あらため

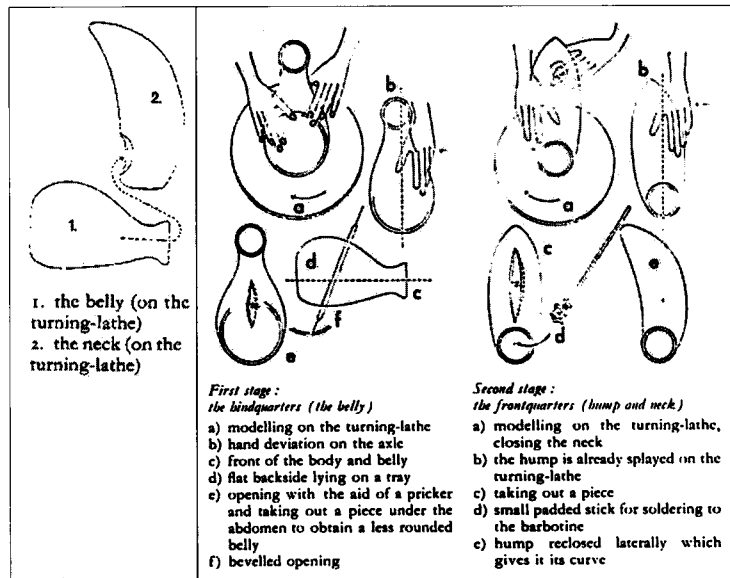


図5. Paul D. Clercによる「こぶ牛形象土器」試作 (Gabus et al. 1967)

てその部分を接合する工程がある。

後者の製作にあたっても同様の、すなわちロクロ上での成形後、手で一方へ偏らせ、さらに刺突用の道具を使用して、腹部にあたる下面をはす縁に切除、あらためて接合し、丸みを減ずるという工程がある。こうして別個に製作された二者は、一日乾燥させた後に組み合わせられる。四肢、

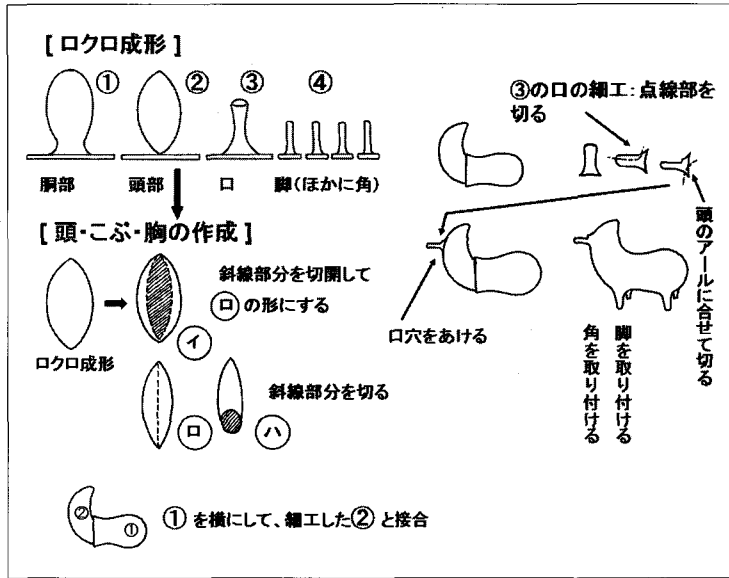


図6. 井手勝彦による「こぶ牛形象土器」成形工程概念図

角等は後に付加させることとなる。

一方、井手勝彦が筆者に教示、そしてこのたびの「特別研究会」において実演の製作法は下記のとおりであり、成形段階だけに限っても、それはいくつかの工程に分かれる(図6)。

まず、ロクロ挽きで胴体部と頭部とを別々に成形する。胴部成形は、Clercによる手法同様、端部の閉塞したかたちを

ロクロ上で仕上げる。頭部(=頭・こぶ・胸)成形も胴部同様に、先ず端部の閉塞したかたちをつくる。しかるのち、長軸方向に沿って一部を柳葉状に切除し、あらためて閉じ合わせ、ラグビーボール状に変形させる。そして再度、端部を円形に切除し、ここに胴部として成形していたものをはめ合わせる。「ラグビーボール」の他端部がこぶの部分にあたることになる。こうして形つくれた胴部に四肢と尾、頭部に角、耳、さらに嘴状の注口などを付加し全体の概形が整う。

実際の作業工程にあつては、もちろんすべての的確な時期があり、これをたがえると作業がむずかしくなる。それは粘土の乾き具合と関連する。すなわち、井手によれば、別個に成形された胴部と頭部とが接合されるには、ロクロ挽後1~2日間おかなければならない。接合後は形を整え、

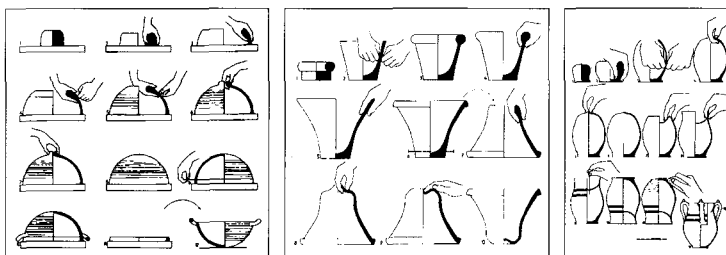


図7. 西アジアの「端部の閉塞」技法: 左はローマ・ビザンツ時代、中・右はイスラーム時代 (Fredericq et al. 1986)

1日間、「室(ムロ)」に入れて確実な接合をまたなければならない。次に四肢、角等を付加し、1~2日間囲い、その後自然乾燥させる。この期間に表面調整(磨研)を施し、3~7日間天日乾燥させると焼成できる状態

となる由。ちなみに、原材料には耐火度の低い土を使用し、900~1,000度で焼成する。天候にも左右されるが、土づくりから成形・焼成等のこれら一連の作業には2週間ほどが必要とのことである。

それぞれ独自に案出されたに違いない前記Clercおよび井手の各製作法には、相共通するところがいくつも見出されることは興味深い。いずれもロクロを使用していること、そして、端部の閉塞したものを形成する工程を持つことなどである。この「端部の閉塞」は、ロクロ成形時に内側へと粘土を引き込み、次第に開口部を狭めて行き、最終的には指先で粘土をつまみ寄せる具合にして小穴を閉じ合わせ仕上げる。この手法は、西アジアの土器作りにおいていまでも土器、陶器作りにおいて普段にみられ、高台部を必要としない水甕（運搬用）や、俵状の胴部（横長でその両端が球状をなすもの）を持つ壺等々の製作に応用されている（図7）。紀元前1千年紀には確実に応用されていたと考える研究者もある。

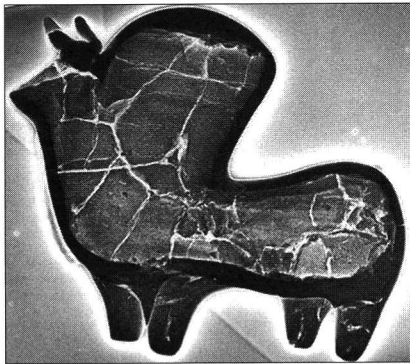


図8. 電子写真法による透視観察写真
(Simpson 1997)

一方、大英博物館所蔵「こぶ牛形象土器」に対する「電子写真法 (xeroradiograph)」による研究成果は異なる所見を表わしている。透視写真の状況は、ロクロ作りではなくハンドメイド、「紐づくり (coiling)」によるものと観察された（図8、Simpson 1997）。

ここでは頸、こぶ、頭部に見られる水平方向のラインが、「紐づくり」における粘土紐の継ぎ目と観察された。「ロクロ目」も一定幅で水平方向の残痕となるので、これとどのように峻別されたのか疑問が残る。ただ、先のClercおよび井手による胴部のロクロ成形法と比較すると、大英博物館資料の胴部内側に、写真

で見ると、その長軸に交差する一定幅の帯条線が見られないことは、やはりロクロ成形でない可能性が高いと考えざるを得ないのであろう。また、「電子写真法」を処方した観察者がほかのタイプの「アムラッシュ土器」についても、これを試みて観察している点を、現段階では評価すべきであらう。もっとも、先述したように、観察対象のこぶ牛形象土器資料が「考古学的一級資料」ではない点、留意しなければならない。

V. むすびにかえて

このたびの人間文化研究所「特別研究」（アジア文化学科担当）での課題は、特異な古代イラン形象土器の製作法を、現代陶工が復元した場合どのような試案が提示できるかについて、その具体例に尋ね、実見・確認することが主たる目的であった。先行研究と比較すると、製作工程のいくつかに確かな共通点を見出すこともできた。もっとも、異なる手法が類似の形象物を生み出すことは、大英博物館所蔵品の研究から指摘される知見を肯定的に勘案するまでもなく、通常一般に有り得ることであり、また、こぶ牛形象土器タイプの「考古学的一級資料」がこれまでに分析対象になったことはないわけであるから、今回は一手法の可能性をただ例示したに過ぎない。さらなる比較データの蓄積が望まれるところであり、その場合確かな考古資料に対しての、たとえば文化財資料の修復・分析の際に昨今応用がしばしば紹介される「エックス線CT(コンピュー

ター断層撮影)」による画像解析はきっと有効であろうと思われる。

様々な動物形象土器さらには「人物形象土器」を含めて、このように複雑な形態の土器がイラン鉄器時代のカスピ海南岸域で多く生産されたのは、それではいったいなぜであったろうか。この課題を考える時、筆者は試みに古代イランにおける「ウシ」に注目したい。それは、マールリーク遺跡第18号墓での「こぶ牛形象土器」の出土状況(図3)およびその「嘴形」という強調された注口形態が、この土器を日常雑器というより、むしろ非日用的な、すなわち儀礼に関わる容器(たとえば「明器」と考えさせるに充分だからである。また、古墓にウシ自体が葬られたのではなく、極めて丁寧な作り具合の土器が、あたかも葬送儀礼における「犠牲獣」に取って代わったかのようになり、なかには金の耳環をもつけ、そして5点一括並列された状態で出土した状況からは、当時イランにはウシに対する特別の思い入れがあったのではないかと推察させられるのである。

古代イランの宗教のひとつゾロアスター教の聖典アヴェスターの世界では、たとえば、「牛と天則を創造し給い、水とよき草木を創造し給い、もろもろの光明と大地と一切のよきものを創造し給うたアフラ・マズダーを、このようにわれらは崇める、(ヤスナ第37章)」、「太陽の光、日々の逞しい牡牛は〔一みなこれ〕天則に従って、御身たちへの礼讃のためにあるのです、マズダー・アフラよ(ヤスナ第50章)」などと、ウシは象徴的に奉られている。ちなみに、引用後半の「牡牛」についてその訳者は、「日々の曙光のことであろう」とみなしている。また同時に、「このようにわれらは牛の魂と牛の造成者なる両者を崇める、ついでわれら自身の魂とわれらを養う家畜どもの〔魂〕とを、—それら(家畜)のためにここなる〔われら〕は存し、またそれら(家畜)もここなる〔われら〕のために存するから—。また役にたつ野獣の魂をわれらは崇める、(ヤスナ第39章)」、とウシは愛惜されているところがある(伊藤訳 1967年)。

それでは、実際、「こぶ牛形象土器」が埋納されたイラン鉄器時代のギーラーン州にウシが家畜獣として居たか?これについては、マールリーク遺跡とセフィードルード川を挟んで対岸に位置するタッペ・ジャラリエ遺跡における発掘調査成果に拠るべきところであろう(大津 2005年)。科学研究費補助金事業(基盤研究B/課題番号14401030/代表、大津忠彦、平成14~17年度)の一環として行われた当該遺跡発掘調査で確認された当遺跡第Ⅲ層より採集の出土獣骨は、フランス国立自然史博物館/CNRS(Centre National de la Recherche Scientifique, Paris)のDr. Marjan Mashkourによって試料の種同定が一部終了している。それによれば、タッペ・ジャラリエ遺跡第Ⅲ層より採集の出土獣骨片2,243片のうち、561片について種同定がなされた。その内訳は、ウシ22%、ヒツジ/ヤギ71%、イノシシ1.8%、アカジカ1.4%、その他(ロバ)であった。分析試料数が決して充分でないものの、割合的には狩猟対象種(ここではイノシシ、アカジカ)が少なく、遺跡出土の獣骨はほとんどが家畜種である、との報告がなされている(Mashkour 2005)。

タッペ・ジャラリエ第Ⅲ層については、出土土器型式の考古学的研究からは明らかにイラン鉄器時代であり、その数値年代についても名古屋大学年代測定センターによる同層採取の炭化物(木炭片)を試料とする、AMS法による放射性炭素年代測定値として 2439 ± 28 B.P.(NUTA2-6212)、 2553 ± 32 B.P.(NUTA2-5760)、 2505 ± 28 B.P.(NUTA2-6215)等を得ている

(Ohtsu 2004)。これらの較正年代値は、紀元前8世紀初から紀元前5世紀末の幅内、すなわちイラン鉄器時代後期に相当し、先述の相伴土器からの考古学的年代観と矛盾しない。ちなみに、比較的大きな木炭片52試料が、同時に樹種同定のためにも供された結果、41試料についてこれまでに判別ができた。それらの内訳には、ポプラ(12)、ハンノキ/ヤシャブ(11)、クルミ(9)、ブナ(3)、ケヤキ(3)、イヌシデ/サワシバ(2)、ブドウ(1)、そのほか可能性のあるものとしてサクラ、ナナカマドなどがある(カッコ内数字は試料点数、Noshiro 2005, 2006)。この分析結果を提供した能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域)によれば、同定に到った樹種はいずれも落葉広葉樹であり、中村徹(筑波大学大学院生命環境科学研究科)が行った現生森林環境調査結果(Nakamura and Zare 2005)に照らし、タッペ・ジャラリエ第Ⅲ層期の植生は、それほど現在とは異なっていなかった、と考えられている(大津 2005年)。

ウシを造形意匠とする考古資料はイランには少なくはなく、それがこぶ牛であったか否かは判然としながらいながらも、時代的には鉄器時代以前まで優に遡る。西アジアに興ったいわゆる「新石器革命」において、その最初期から重要な役割を果たしたヒツジ/ヤギとはまた異なるウシの存在があったらしいことを、これら家畜獣にとって、より適合する自然環境の違いから想定することができるかもしれない。

「こぶ牛形象土器」が葬送儀礼用具の一つとして古墓に副葬された鉄器時代のギーラーンの自然は、今日と同様の湿潤気候(ただし、ギーラーン州の山寄地域の場合、夏期は極めて少雨)がもたらす森林繁茂の環境であった。当時の古代人にとっては、ヒツジ/ヤギと同等以上に、ウシが有益かつ特別扱いされる何がしかの理由があったと推察される。すなわち、鬱蒼とした森林環境をきり拓く時の牛の有用性、ウシを葬送儀礼に不可欠の犠牲獣とする風習、そして、やがて実際の犠牲獣ウシに取って代わる「明器」としての形象土器の副葬品等々。しかし、現況これを裏付ける考古資料の集成はほとんど無に等しく、ましてやそれを、「印欧族」のイラン高原への移入や「ギーラーン州森林地帯開発は鉄器時代以降の技術革新」などに関連させる試論は、さらに深められる余地がまだまだ大きいままである。

【参考文献】

伊藤義教、1967年、「アヴェスター」、『ヴェーダ アヴェスター』(訳者代表 辻直四郎)、世界古典文学全集 第3巻、筑摩書房。

大津忠彦、2004年、「柿崎尚のイラン考古資料蒐集記録をめぐる」、『オリエント』第47巻第1号、86-95頁、日本オリエント学会。

大津忠彦、2005年、「日本へ東漸したシルクロード文化故地の環境的背景に関する研究—カスピ海南岸域古代遺跡出土の動・植物遺存体分析と古代史変遷との相関について—」、『平成16年度歴史学・地理学助成報告書』、16-20頁、福武学術文化振興財団。

大津忠彦、2006年、「日本・イラン共同考古学調査研究事業—経緯と研究環境上の諸問題—」、

国際文化研究所紀要『論叢』第17号、141-152頁、筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部。

柿崎尚 [1964年]：『タッペ(丘)を訪ねて』(記録帳)。

ゾイナー、1983年、『家畜の歴史』(国分直一、木村伸義訳)、法政大学出版局。

Fredericq, D. H. and Franken, H. J., (ed.), 1986, *Pottery and Potters-Past and Present*, Tubingen.

Gabus, J. and Junod, R., 1967, *Amlash Art*, Hallwag, Berne.

Hakemi, A., 1973, Excavations in Kaluraz, Gilan, *Bulletin of the Asian Institute*, no. 3, pp. 1-3, Shiraz.

Mashkour, M., 2005, Animal exploitation in the lowland pasture of Guilan (Iran) during the Iron Age. A preliminary archaeozoological study of Jalaliyeh Kaluraz, in Ohtsu et al. (ed.), *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season*, pp. 96-108, Tehran and Tokyo.

Nakamura T. and Zare, H., 2005, Vegetation around Tappe Jalaliye, Northwestern Iran, in Ohtsu et al. (ed.), *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season*, pp.117-121, Tehran and Tokyo.

Negahban, E. O., 1964, *A Preliminary Report on Marlik Excavation*, Tehran.

Negahban, E. O., 1996, *Marlik The Complete Excavation Report*, 2 vols, Philadelphia.

Noshiro S., 2005, Identification of Charcoal Samples Excavated from Tappe Jalaliye Layer II, III, in Ohtsu et al. (ed.), *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fourth Season*, p. 122, Tehran and Tokyo.

Noshiro S., 2006, Identification of Charcoal Fragments from Tappe Jalaliye Layers II and III, in Ohtsu et al. (ed.), *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Fifth Season*, pp. 169-174, Tehran and Tokyo.

Ohtsu T., 2004, AMS Radiocarbon Measurement of the Samples from Tappe Jalaliye, in Ohtsu et al. (ed.), *Preliminary Report of the Iran Japan Joint Archaeological Expedition to Gilan, Third Season*, pp. 93-94, Tehran and Tokyo.

Simpson, St J., 1997, Early Iron Age Rural Ceramic Traditions in Iran, *Pottery in the Making -World Ceramic Traditions* (ed. by Freestone, I. and Gaimster, D.), British Museum Press, London.

(おおつ ただひこ：筑紫女学園大学文学部アジア文化学科教授 ohtsu@chikushi-u.ac.jp)